

# 北神塾

## 第4講「世界の中の日本 ―日本の外交・安全保障・防衛方針―」①

2014. 8. 8 (金)

今日は外交・安全保障の話ですが、釈迦に説法の部分があるかもしれません。本当に基本的な話からしていきたいと思います。「基本的」というのは、今中国に対してどうしたらいいのかとか、それ以前の問題として、「なぜ防衛が必要なのか」とかね。皆平和を望むことは大体一緒だと思います。一部の、本当にちょっと変わっている方以外は、皆そりゃ「平和に生きたい」と思っている。でも「なぜ戦争や防衛というものが存在するのか」、あるいは、「平和をどうやって守っていったらいいのか」とか、そういう基本的なところからお話ししたいと思います。ですので、今日で全部完結しないかもしれません。来月第2部を設けていますので、そういったところで具体的に、今日本が置かれている、北朝鮮の問題や中国の問題にも触れていきます。

何でこんな基本から始めるかと言いますと、私もずっとアメリカに住んでたり、ヨーロッパ人やアジア人の人と話したりしていても、日本ほど、この「防衛」について意見が真っ二つに分かれている国を知りません。もっと言えば、我が国は、世界の常識とちょっと違う考えをすごく強く持っている人が、かなりの人数いらっしゃいます。その理由としては、一つ目に、先の大戦で非常に悲惨な経験をして、原爆を落とされて、「もう本当に懲り懲りだ」と。だからもうとにかく、軍事とか「そんな話もしたくない」という、心理的な反動、歴史的な経過があります。もう一つはね、二つくらい前の北神塾で、「国家の物語」についてお話ししましたが、そこでも申し上げた通り、日本というのはある意味で特殊で、二千年の歴史の中で、日本海という海、ある意味ではお堀み

たいなものです。そのおかげで、外国から侵略されにくい地理的な条件が整っていた。反対側の太平洋、これもこんなに大きいお堀は無いわけですよ。ですからこういう自然の「お堀」に、二千年間守られてきて、あんまり外国と戦争したり、外国に侵略されたりというのは、他の国に比べたらほとんど無いです。従って、あんまり慣れてないというかね。「軍事」とか、「外国からの侵略をどうやって防ぐか」とか、そういったことをあんまり考える必要が無かった。

この二つの理由で我が国独特の考えを持つに至ったと思っています。私の話によって、この真っ二つに分かれているギャップを出来るだけ狭めていければなとも思っています。ギャップが完全に埋まることは無いと思います。最後は価値判断の問題なので、そこは埋まらないと思います。外国でも、このくらいの違いはございます。でも日本で聞こえてくるような、とにかく「丸腰で何もしなくてもいいんだ」とか、「ただ文化交流をして、ニコニコして話し合えば軍事力なんか何の必要も無いんだ」という類の議論は、あまりにも日本独特の議論ですので、そういったことに対しては私は反対の意見を述べさせていただきます。

まずレジュメの最初に、「我が国の基本方針」とあります。これは私が勝手に作ったものなのですが、他の国の政府は大体基本方針というものがあるんです。ですが、日本というのはいくつかのものを何も作っていないんですね。ここに書いているのは、おそらく大半の日本人が「これは常識的やなあ」と思っているであろうことを並べさせていただきました。

まず一番目ですが、日本の国が、外国を侵略することによって利益があると思っている人は多分ほとんどいないと思います。「侵略」というのは、軍事的侵略ですね。これはいわゆる右翼みたいな人でも、保守を自認する人でも、「外

国に攻めて行きたい」と言うような人はほとんどいないと思います。そういう考えも無いです。安倍さんや、京都で言えば西田昌司さんなんかを、「戦争好きのやつや」とか言われる方いますけど、私も彼らと喋ったりしますが、彼らも「戦争したい」と思っていない。他の国ではそういう人がいます。これが大きな違いですね。自分達で攻めるつもりは全く無いと。

で、二番目、「しかし、外国に侵略をされるのは嫌だ」と。あるいは侵略までいかななくても、軍事力で脅されたり、威嚇されたりして領土をとられたりすることも避けなければいけないというのも、多分大半の日本人が思っています。これは左翼の、「とにかく話し合いだ」と言っている人でも、「外国に侵略されるのをよしとしますか？」と聞くと、「それは嫌だ」と言うに決まっていると思います。

三番目に、だから平和を守って、侵略もしないし、されないし、その中で自分達のやりたいことをやる。まあ仕事をしたり、自分の志を追及したり。豊かな家庭生活を送ったり、友達と遊んだり。このように、この三つに異論を唱える人は多分いないと思います。一番大きな基本方針としては、これで十分なんです。私がこれから展開する議論は、これに基づいているものです。

では、「平和をどうやって守るのか」。これは私がでっち上げたことではなくて、歴史的にいろんな国の行動を見て、どうやって各国は国の平和を守ってきたのか、ということを見ていきたいと思います。最初は、「話し合い」ですね。何か不都合があったら、テーブルに着いて話し合って、「うちはこのように困ってんねん」とか言う。例えば、中国の毒ギョウザの問題で、「あなた達のギョウザで何人かに中毒症状が出ました。日本はこんなことは許せません。犯人を追及してほしい。どういう過程でこういうことになったのか、やった人

に対して責任を明確にしてほしい。場合によっては処罰してほしい」と、こういう話し合いをすることですね。あるいは今 TPP なんかでも、農業の問題でアメリカは「農業を開放しろ」と言う。でも「それは日本にとって困る」と。そういったことを今話し合いをしているところですね。

二つ目は、「お互いの利益が絡み合うための相互依存」。ちょっと難しいですけど、お互いのしがらみを作ることですね。要するに、「切っても切れない仲」になる。夫婦のように、必ずしも仲がいいとは限らない。ケンカもするし、本当は心の中で「鬱陶しいなあ」と思ってるけど、でも決定的なケンカは出来ない仲になる、ということです。学問でも、「経済的依存」って言うんですけどね。つまり、頻繁に人も交流してる…例えば、日本から中国に会社が沢山行っている、中国人の留学生や労働者も日本に入ってる。日本も中国に対して貿易が多い。中国は日本から最先端の技術とか、そういったものを輸入している。そうしたら、お互い取引して商売して、お互い利益を出している。そういう状態であれば、「幸福だ」、「そんな時に、わざわざ戦争をする必要は無いじゃないか」となる。だからそういう緊密な関係を作っておくことによって、出来るだけ平和を守っていくというのが二つ目のやり方ですね。

で、三つ目のやり方というのが、「抑止力」。後で説明しますが、抑止力というのはまあ、「相手を止めて抑える」ということですね。この「抑止力」にも、三つあります。一つは、レジュメのイ、「日本は平和と正義を愛し、これを追求しています」という「大義名分」を持つことですね。なぜなら「大義名分」を持っていたら、国際世論というものが、そういう優等生の国に誰かが侵略したりすることに対して、やっぱり非難をしますわね。「日本は何もしてないのに、お前は何で喧嘩を売るんだ」とか。こういうことは非常に大事なことです。これは軍事学でもそうです。中国の孫子の「兵法」というのは有名です

けど、そこでも一番最初に出てくるのが、「大義名分をつかまないといけない。これが一番大事だ」と。つまり悪者になっちゃうと、いくら自己主張しても誰も聞いてくれないということですね。

二つ目が、レジュメの口にある、同盟国や友好国による抑止力。これは、友達をたくさん増やすということですね。日本はアメリカと同盟国ですが、まあ「同盟国」というのは非常に特殊な関係です。相手がやられたら駆けつけて、一緒に守らないといけないという、こういう義務を課すことです。これが「同盟国」。「友好国」というのはそこまでいかないけれど、「まあ場合によってそうしてもいいなあ」というもの。「日本のことは好きやし、日本とは強い国家間の関係があるから、何か日本が困った時には我々も馳せ参じますよ」と。そういう友達のような国というのが大事なんです。これも抑止力になります。というのは、友達の多い人に、なかなか喧嘩は売りにくいわけですよ。皆に好かれて、ワイワイやっている人よりも、むしろ孤立している人に矛先は向きやすい。そういった意味で、これも抑止力になる。

それで最後にレジュメのハ、「軍事的抑止力」ですね。「軍事的抑止力」というのは、簡単に言えば、「この人にケンカを売ったりするとものすごくややこしいことになる」ということです。ですから、「こいつケンカ強そうだから、ケンカ売るのは得策じゃないなあ、やめておこう」と、そういう抑止力ですね。

一言で「抑止力」と言っても、こういういろんな方法があって、何も「一つだけしか駄目」ということは無いんです。どの国だって、皆これらの組み合わせでやってきてます。ただ戦後の日本だけが、このレジュメの3のハ、「軍事的抑止力」というものに対してかなり議論が分かれました。自民党政権のもとでは、ずっと必要だということで日本の自衛隊を…これはまあ、普通に憲法9条読んだら、「陸・海・空の軍を持たない」って書いてあるんですよ。そうい

う意味では、「何で自衛隊が陸・海・空の軍じゃないの？」って思われることもありますよね。そういったところを自民党は解釈を重ねてね、「自衛隊は許されるんだ」とした。そして自衛隊だけじゃなくて、アメリカの核兵器の抑止力を使ってるんですね、冷戦時代は。「ソ連が核兵器を日本に撃ち込んだ場合には、アメリカがすぐ撃ち込みますよ」と。そのために日米安全保障条約っていうのを作って、軍事的抑止力でソ連に対して、あるいは共産中国に対して抑止力を効かせてきたんですね。

ところが、それは自民党とか一部の人間だけであって、戦後、むしろ大半の人は多分「何でそんなことしてるの」と、「アメリカと軍事同盟結ぶことによってむしろ挑発してるやん」と感じていた。ソ連も、「アメリカとだけのケンカだったのに、日本もアメリカにくっついたから日本も敵や」と、こういう議論でしたね。今の集団的自衛権もそういうきらいはありますね。集団的自衛権を認めて、日本とアメリカは一緒に軍事行動をすることになったら…例えばイスラムのテロ。「今までだったらアメリカを標的にしてたのに、日本は完全にアメリカと一体でやるって言ってるから日本も敵だ、日本でもテロを起こそう、となる。だからそんなややこしいことはやめてほしい」という声が、日本では非常に大きいです。

次に、「抑止力とは何か」というところなんですが、辞書を引いてみると、「活動をやめさせる力。思いとどまらせる力。」とあります。「核抑止力」とか、「犯罪の抑止力」とか、こういう風に使われているわけです。だから、「ケンカを売のをやめさせる力」、「ケンカを売のを思いとどまらせる力」、「侵略をするのをやめさせる力」というのが「抑止力」なんですね。ですから、「軍事力」というのは何も、実際に戦争をするためにやる機能だけじゃなくて、こういう

「抑止力」、「思いとどまらせる力」にもなり得ると。それによって平和というものが生まれる、という考え方ですね。

二番目に、もう少し踏み込んでいきますと、外交的には、敵が攻撃したいと思っけていても、「攻撃してしまおうと自分が不利になる、だからやめておこう」となる抑止力があります。これは、防衛じゃなくて外交の話ですが、例えば、「攻撃をすることによって自分の国の評判が悪くなってしまおう」とか、「世界にあんまり相手にされない国になってしまおう」とか。まあ北朝鮮とか、こういう国はもう割り切ってるわけですね。「いくら評判が悪くなくても構わない」と。ある意味ではロシアなんかも、そういったところがありました。中国っていうのは、今揺れ動いてますね。本当は出来るだけ、評判のいい、清々しい大国になりたいと思っている。まだそういう希望は繋いでいるわけです。かなり無理があるようになってきていますが、でも中国の本音は微妙に揺れてるんですね。そういう世界からの評判の話が一つ。もう一つは、経済的に損をすること。つまり、「戦争をしちゃうと自分達は経済的に駄目になる」とか、こういう抑止力ですね。

で、三つ目の軍事的抑止力っていうのは、これはもう簡単に言えば、「倍返しされちゃう」と。「こっちが下手にケンカ売るとコテンパンにやられて、もうどうしようもなくなってしまう」と思いとどまるようにすること。先の大戦での山本五十六さんという人は有名ですが、「百年兵を養うは……ただ平和を護らんがためである」という言葉を残しています。ここで言いたいのは、何も「軍事力を強化するからすぐ戦争」というわけではない、ということです。皆さんどう思われるか分かりませんが、多分「それくらいだったら分かる」とおっしゃるかと思います。じゃあどこで意見が分かれるのかというと、いわゆる「負の連鎖」、「憎しみの連鎖」、「恐怖の連鎖」っていう考えですね。つまり、

こっちは中国に対して「何も中国の本土を攻めるつもりは全く無い。でも、中国にやられるのは嫌だから軍事力を強化して、例えば沖縄とか南西諸島の海軍力を強化する。そうしたら中国が『日本はやる気か』と警戒して自分達もさらに軍事力を強化して行って…となる。そうなれば、何かの拍子で実際に戦争になってしまうかもしれない。だから北神さんの言ってることは間違ってる。あなたの言ってる『抑止力』というのは、そういった場合もあるかもしれないけど、下手すると本当に戦争になってしまう」という考え方ですね。そういったところは、永遠に埋められないギャップです。私もね、正直に申し上げると、その可能性もあるとは思っています。だから、抑止力を強化する…安倍さんも今、「僕は何も戦争をするために集団的自衛権をやっているのではない」と言っていますが、場合によっては、そうやって軍事力を強化し、いわゆる「毅然たる対応」を採ることによって向こうもどんどん加熱して、「お前がそこまでやるんだったら今度はこっちだって」…みたいな状況になってしまうかもしれない。

冷戦時代はそういう状況だったんですね。アメリカが核兵器を500発作ったらソ連は600発作る。ソ連が月にスプートニクを、衛星を送り込んだら、今度はアメリカもアポロというロケットを送ると。要するに、お互いに張り合っていて、核ミサイルをどんどん作っていった。そういう状況はありましたし、実際にいろんなところで小さな紛争はありました。でも結局、冷戦の結果を見てみると、あれはお互い自制心が効いて、さすがのソ連も、「ここで核ミサイルをアメリカに撃ったら向こうも撃ってきて、本当に第三次世界大戦、核戦争みたいになって、人類が滅亡する」みたいなことは皆分かっていますから。結局誰もそのボタンを押さなかったという意味では、冷戦における核の抑止力というのは成功した、というのが大体の専門家の評価ですね。



次に、抑止力の考え方の具体的な事例を挙げておりますが、これは、軍事よりも外交の方が上なんです。「上」というのはどういう意味かと言うと、外交がやっぱり一番大事なんです。「外交の方針があって、軍事はそれを助ける」というのが、普通の考え方です。過去に失敗してきた国…戦前の日本もそうですが、それは「外交よりも軍事が偉い」としてきたんですね。そうすると、軍事的なことで侵略したりする。狂ってしまうんですね。外交というのは最後は「平和を守ること」なんです。軍事的要請だけでいくと、どんどん侵略したり、相手の領域に進出したりね。そういったことをしてしまっただけで、自分を抑制する力が全く出てこない。ある意味では、今の中国だってそうかもしれません。外交部が、人民解放軍の海軍を抑え切れていないところがありますね。だって皆さん、また次の講義で言いますが、中国は明らかに戦略的に失敗しています。日本人からしたら、「中国が上手いこと押し寄せて来て、日本はぼんやりしてるからどんどんやられてる」という認識の人が多いですが、もっと大局で見たら、中国は世界にケンカを売って、自らの首を絞めてます。だってそうでしょう？東シナ海でも、尖閣諸島を巡って日本とやり合っている。フィリピンとも、南沙諸島でやり合っている。西沙諸島ではベトナムともやり合っている。全体的にはアメリカともやり合っている。こんなやり方では、いくら超大国でも長続きするはずがありません。軍事戦略的にも全くおかしいことをやっています。

じゃあ何でそうなったのか。「日本とはここで仲良くして、まずはベトナムとやり合おう」というのが、昔の中国のやり方でした。他のところとは仲良くやりながら、相手を孤立させて一つ一つつぶしていく、というのが中国のやり方だったんですが、今見てみると、もう全面的に、皆とケンカをしている。これは愚の骨頂ですね。だから中国が戦略的に失敗しているのは明らかです。そ

これはなぜかと言うと、やっぱり中国の外交の人達が、軍を抑え切れていないんですね。軍部はそれぞれ、ある意味では島を奪い取ったら自分の成果になりますからね。「ここで西沙諸島を取ったぞ」と。それで後で、外交部の人達が尻拭いをするような感じで、「いや～、こんなことしちやったけど、あんまり弱気なことも言えないし、かといってあんまり挑発も出来ないし…」ということで、その対応に追われている、というのが今の中国の状況だと思います。ですから、外交が一番上、優先なので、一番大事なのは「外交的抑止力」だという風に私は思っています。その具体的なお話をしたいと思います。軍事的抑止力のお話も最後にします。

この「外交的抑止力」の話をなぜするのかというと、一言で言えば、友達をまずたくさん作ることが大事なんですね。その友達を使って、敵を抑え込むことが一番最高の戦略だと思っているからです。そりゃ、日本とアメリカとオーストラリアとニュージーランドとインドネシア、フィリピン、ベトナム、インド。こういった国が皆中国を非難し出したら、やっぱり中国だって「怖い」と、「これはまずいな」という風に思います。ですからこれが一番重要。戦わずして外交戦に勝つという意味で、これが一番重要なところなので、いろいろな例を挙げています。

日本だって、そういうことをしていたんですね、ちゃんと。これは日露戦争ですが、東郷平八郎さんっていうのは有名ですよ。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊に勝ったと。これは第2講の「国家の物語」でも申し上げましたが、世界史を大きく変えた事件です。つまり、今まで「白人に敵うはずがない」とアジア人は思っていたわけですね。ベトナム人も中国人も、皆「白人にはとても敵わないんだ。これはもう宿命だ。白人は俺達より何か知らんけどすごいやつなんや」と思っていた。ところが日本が初めて、ロシアという当時の軍事的

に最も強い国に日露戦争で勝つんですね。これはもちろん東郷平八郎の差配の上手さもあつたし、海軍力の強さもあつたし、それをちゃんと支えた国民や政府の力もありました。でも、あんまり語られないのは、実は当時、「日英同盟」という 1902 年にイギリスと結んでいた同盟があつたんですね。イギリスとの同盟関係です。日露戦争が 1904～05 年ですから、その前にちゃんと結んでるんですね。結んだ理由は、「ロシアがやばい」ということ。「ロシアと日本一国で喧嘩するわけにはいかない」ということです。だから仲間を作らないといけないということで、日英同盟というものを作つたし、あんまり日本が悪者にならないように、立ち居振る舞いにすごく気を付けたわけですね。つまり、他の欧米諸国にも「日本がおかしい」と思われぬように、わりと国際法を遵守して、世界から「日本はなかなか、ちゃんと礼儀正しくやってるな」と思われるようにしていた。

一方、ロシアはどんどん南の方に進出してきて、満州にも入ってきた時代ですから、ロシアの方が「悪いやつだ」と思われるようになっていった。ですから、日本はそういう外交を上手く展開して、実際の日露戦争の日本海海戦の時にどういうことが起きたかという、バルチック艦隊に、確かに勝ちました。でもあの時のバルチック艦隊というのは、疲労困憊していたんです。もう疲れ切っていたんですね。なぜ疲れ切っていたかという、バルチック艦隊というのは、日本と戦うためにはずっと地中海の方から日本海まで来ないといけなかったんですね。ところが日英同盟によってイギリスが、ずっといけずをしてきたわけです。本来だったら一番の近道は、スエズ運河というエジプトの半島のところを通して、それでインド洋からシンガポールのあるマラッカ海峡、南シナ海、東シナ海、日本海…と来るのが一番速いルートだったんです。それを、イギリスがスエズ運河を管理してたから、日英同盟の下で、「わが友、同胞日本のた

めに、あなたたちロシア人を通すわけにはいかない」と言っていけずをするわけですよ。そうしたら、バルチック艦隊はもうアフリカ半島をぐるーっと回らないといけないわけですよ。これ、えらいことなんですよ。しかもね、イギリスは各地域で港を持っているんです。彼らも武力でいろんな港をぶんどっているんで、悪いところもあります。ただイギリスはそれをするのが早かったんです。日本は後から来たので、流行に遅れちゃったんですわ。流行を作ったのはイギリスなんですね。流行を作る人は大体許されるんですよ。イギリスはそうやって港を作ってきた、と。それでバルチック艦隊は、アフリカをずーっと回ってきっていた。当時の船は、一か月に一回くらいは港に寄港して、水や食料、燃料…薪、木材が必要なんですね、そういったものを補給するんです。ですが、イギリスは全部いけずして、ロシアに全然あげないわけですよ。「駄目だ」と。「我々は日本の味方だ」と。そうしたらバルチック艦隊の人達は腹が減るし、燃料も無いしね。もう疲労困憊して日本海に入ってきて、そこで日本にやられるんですね。

もう一つ言うと、日本はその日本海海戦の後に、二百三高地なんか有名ですけど、今度は陸の方で、乃木将軍とか、あの辺がどんどんロシアの北の方に向かっていくんです。北の方に向かって行けば行くほど、ロシアの方がだんだんまた有利になってきたんですね。日本はやっぱりどんどん兵糧も減っていくしね、どんどん奥地に引き込まれていく。そしてロシアがだんだん有利になっていく。その時に救ってくれたのはアメリカですね。アメリカのセオドア・ルーズベルト大統領が、「日本とロシア、お互いこんな不毛な戦争はやめておけ」ということで、ポーツマスにロシアと日本の代表を呼んで、そこで講和条約を結ぶわけですよ。つまり、日本はそこで救いの手を差し伸べられたんですね、アメリカに。あのままやっていたら、また戦争が長引いて、どう転ぶか分から

なかったわけですね。何が言いたいかというと、軍事力も大事だけど、「同盟」、「友達」、これを多く持てば持つほど、絶対に有利だということです。

まあ日本だけじゃなくて、次はイギリスの例を見てみましょう。イギリス、この人達から学ぶべきことは多いです。彼らは悪いこともしていますが、外交は多少悪くないと駄目なんです。19世紀後半、20世紀初頭の外交を見てみると、七つの海を支配する大英帝国だったのが、かつて植民地だったアメリカが、図体が大きいからです、だんだん力をつけてくる。ヨーロッパの方では、ドイツの方が最早軍事力が強く、陸軍なんかは、イギリスはとても敵わない。海軍はまだイギリスの方が強かったけど、ドイツも相当力をつけていたと。軍事力だけじゃなくてね、当時のイギリスの大学なんかに行くと、ドイツ語を勉強していないと何も勉強出来ないくらい、ドイツの学問が発達していたんですね。理系も文系も、ほとんどドイツが進んでたんですね。だからそういった意味では、ドイツには完全に圧倒されていた。その時にイギリスは何をしたかというと、友達作りをするわけですね。アメリカという友達と、フランスという友達。イギリスなんかは、本当は腸が煮えくりかえるくらいアメリカのことが嫌いなんですよ。だって、イギリスはアメリカのことを「自分達の国の乞食とか売春婦とか政治犯とか、そういった人達が逃げて行った成り上がりの成金だ」と思っていた。どのくらい腹が立っていたかというと、独立戦争の後、アメリカの外交官がイギリスに行って、トイレを借りに行くんですね。昔ですから、当時は外にトイレがあるんですね。イギリス人はアメリカ人と違って少しひねくれてますから、アメリカ人を表立っては馬鹿にしないんです。そこでアメリカ人がトイレに行くと、そのトイレの中にジョージ・ワシントンの肖像画が飾ってあるわけですね。トイレに！要するに、アメリカ人からしたらそれは屈辱なわけですよ。だからそのくらいイギリス人は、アメリカ人というのをものすごく

嫌ってる。しかもアメリカ人は説教じみてるんですね。イギリスはいろんな国を植民地支配して、いろんな国を属国にしてね。全部ただただ軍事力でやってきたわけですよ。赤子の手をひねり上げるような感じで、いろんなところを支配していた。アメリカというのは、仏顔をして、「そんな悪いことをしちゃいけません」、「もっと道徳的な外交をしないとイケません」とか、こういうことを言うわけですよ。アメリカ自身は南米に対して好き勝手やってるんですよ。でもイギリスに対してはそういうことを言う。イギリス人にしてみたら、カチンと来るわけですよ。本当だったら、「こんな屈辱を、アメリカ如きに我々が言われる筋合いは無い」、「こんな国とはつきあわない」とか、あるいは「喧嘩してもいいくらいだ」となるところを、イギリス人はぐっと我慢するわけですね。なぜ我慢するかというと、「アメリカも鬱陶しいけど、ドイツはもっと鬱陶しい」ということがあるからです。しかも、ドイツの方がイギリスに近い。「アメリカが大西洋を越えて侵略してくることはまず無い。しかもそういうお国柄じゃない。でも、ドイツは狙ってくる」と。だからイギリスは我慢するんですね。大統領の写真をトイレに飾るような人達が、皆黙って「はい、分かりました。アメリカさんの素晴らしい、道徳的な外交を我々も一部学ぶこともあるかもしれません」とかね、そんな感じで言うわけですよ。もう一つは、フランス。フランスはもっと腹立つわけですよ。イギリス人はフランス人のことを陰では“frog”、「蛙」って呼ぶことがあるんですね。100年戦争もやってるしね、ずっと戦争してるんですよ、お互い。だからフランスなんかもっと腹が立つ。当時はフランスも植民地支配してましたから、彼らはそこでも対立していたんですね。イギリスとフランスが衝突していた植民地の領域が、全部で17か所あったんです、世界に。イギリスとフランスは「ここは俺達のものや」と、お互い好き勝手していたんですね。本当は現地の人達のものなんだけど。ところ

がイギリスは、「ドイツがやばい」と思ったら何をしたかということ、その17か所の植民地の問題を全て解決するんですね。矢継ぎ早に。しかもどうやって解決するかということ、フランス人の言うことを全部飲むんです。そこでちょっとでも自分の利益になるようなことはしません。「はい、分かりました。フランスさんの言う通りにします。これも全部フランスさんにあげます」とね。17か所ですよ。これもイギリス人に見たら、すごい屈辱ですよ。それは政治家、外交官にとってだけではなく、国民にとっても。国民は多分突き上げたと思いますね。「お前ら何してるんだ。弱腰外交だ」、「宿敵のフランスに全部譲って、何してるんだ」、「あんなイギリスから逃げて行った人が作ったような国であるアメリカの言いなりになって、何をしてるんだ」と。国民からの突き上げもあったけれども、イギリス人は「我々は絶対にドイツには勝たないといけない。フランスやアメリカは、鬱陶しいけれど危害は加えない」と、こういう発想の中で我慢するんですね。これが「外交的抑止力」で、彼らの我慢が実って、屈辱を耐えたことが実って、第一次世界大戦ではフランスとアメリカはちゃんとイギリスと一緒にドイツを叩いて、ドイツは負けるわけですね。それをもう一回第二次世界大戦でやるんです。だから実は、英米の国というのは一見傲慢で、自分で好き勝手やるように見えて、この人達ほど「友達」とか「仲間」を作っていくプロはいないと思います。他の国はどうしても孤立しちゃうんですね。友達を作らずに、「俺様がやるんだ」と。ドイツも、日本もそうでした。「ちょっとでも俺に文句を言うんだったらお前はもう関係無い」と。それでいつの間にか、世界を敵にしてしまう。これは、戦争以前にもう負けてます。だからそういった意味で、外交的抑止力というのは大事です。

3番目に、先程「英米」と言いましたが、アメリカもイギリスの真似をして、第二次世界大戦から冷戦まで、ずっとアメリカというのは仲間を作ってきたん

です。これについては私もアメリカの軍事の専門家からも聞きましたが、第二次世界大戦というのは、ヨーロッパのイギリスやフランス、あるいはロシアといった国と連携してドイツを抑えた。アジアでは中国とか、場合によってはロシアとも…つまり、あんなに共産主義を嫌うアメリカ人も、ドイツとか日本を叩くためだったら、スターリンとも手を結ぶわけですよ。アメリカ人にしたら、「何であんな共産党の人達と手を組まないといけないんだ」という気持ちはあったけど、やっぱりドイツとか日本を叩くためには、スターリンとも手を結ぶ。こういう世界なんですね、外交の世界というのは。そういう中で第二次世界大戦で彼らは勝った。アメリカ一国じゃ勝てないです。でも、そういう連携をして戦ったと。

冷戦になると、今度はソ連と喧嘩するわけですね。今まで手を組んでたスターリンと、今度は対立する。アメリカのソ連に対する基本的戦略というのは、「出来るだけ多くの仲間を作る」ということ。本当は日本も軍事的には解体したかったんです、アメリカは。でも「日本よりもソ連の方が怖いな」と思い直した。そうしたら、「日本もどんどん自衛隊を作って、アメリカと一緒に戦った方がアメリカにとって有利だ」と、こういう発想にすぐ転換するんですね。これは東南アジアの国もそうですし、ヨーロッパの国もそうです。今集団的自衛権も問題になっていますが、アメリカにしてみたら、日米同盟なんか非常に不利な条約ですよ、基本的には。だって、日本が攻められたらアメリカは戦わないといけない。でもアメリカが攻められても日本は戦わなくていい、という、こんな軍事同盟というのは歴史的にあまり無いですから。というか、私が知っている限りではゼロです。日本人は「いや、日本に基地を設けてるじゃないか」とか言うけど、命を懸けることと、基地を置くことは、重さが全然違います。それはそういう目に遭ったら絶対分かると思います。基地を置くことによって



生じる問題ももちろんありますが、自分の子供が死ぬことと、飛行機の騒音に悩まされることは違います。だからアメリカ人に見てみたら非常に不利な条約だけど、日本人の気持ちのある程度察して、「日本国憲法も大事にしてるからまあしょうがないな」ということで、やってきた。ヨーロッパだったら、ルクセンブルクみたいなね。兵隊も 450 人しかいないような小国でも、アメリカは丁寧に「何か困っていることはありますか？」とか、そんなことを訊くわけですよ。ルクセンブルクのような小さい国なんかは、別に放っておいてもいいように思うかもしれないけど、ソ連を包囲して出来るだけアメリカの仲間を作るという戦略を、アメリカは冷戦時代にやってきたんですね。ですから、よく「アメリカが冷戦に勝ったのは軍事力のおかげだ」とか、「経済力のおかげだ」と言う人がいますが、本当を言えば「外交力」なんですね。つまり、ソ連を孤立化させることに成功したんですね。だからそういうことが「外交的抑止力」としてあると。これが外交的抑止力の話です。

軍事的抑止力の話としては、これはもっと単純な話で、レジュメ 2 枚目の、4 に「冷戦時代の米国の「封じ込め」戦略」とあります。これは要するに、ソ連がどこに行ってもちゃんとミサイル等を配置して、彼らが身動きを取れないようにいろんなところに軍事力というものを配置した。最後は核兵器ですね。ソ連が好き勝手出来ないようにした。

あまり知られていないので、次の 5 「シンガポールの「Poison Shrimp」(= 毒エビ) 戦略」をしっかりと説明したいと思います。シンガポールという国は都市国家で、東京と同じくらいの大きさです。もう本当に小さい国。その周りを見るとね、マレーシアとかインドネシア、ベトナムといったように、シンガポールに比べたら大国、強烈な国に囲まれています。シンガポールは軍事力はそんなに大したことないんだけど、少数精鋭で、非常に軍事力に力を入れている。

そんな彼らの戦略は何かというと、“Poison Shrimp”、「毒エビ」という戦略なんです。これはどういうことかということ、「もう食べられてしまうことは諦めなあかん」と。「シンガポールみたいな小さな国がいくら軍事力を強化したり、兵隊一人を百戦錬磨の兵士に鍛え上げられたとしても、そりゃ勝てない」と。でも、「あいつらに食われたら、必ず腹痛で悶え苦しむようにしてやる」と。こういうことを平気で、彼らは国家の戦略として言ってるんですね。だから何が言いたいかということ、シンガポールみたいな都市国家でも、ちゃんと軍事的抑止力というものを考えてやっている。シンガポールについて言えば、彼らの外交的抑止力はずっとすごいですよ。TPP なんか、日本ではよくインターネットなんかで一部の人達が「あれはアメリカの陰謀だ」とか言っていますが、そんなことは嘘で、元々TPP を作り上げたのはシンガポールなんですね。民主党政権のはるか前、10 年くらい前からもう TPP というのは始まっていました。何でシンガポールが TPP を言い出したのかということ、中国に対して外交的、経済的抑止力を作るためですね。つまりシンガポールは、放っておけば中国の市場に依存しないとイケない。中国に物を買ってもらわないと生きていけないようになってしまう。そうしたら、例えば毒ギョウザの問題がシンガポールで発生して、それに文句を言って、中国に「誰のおかげで飯を食ってるんや」と言われたら、「いや〜、すみません」と言うしかなくなる。それをシンガポールは嫌がって、外交的、経済的抑止力のために、「じゃあ中国と同じくらいの規模の市場をもう一つ作ったらいいじゃないか」となった。それが TPP なんです。アメリカも入れて、日本も入れて、東南アジアも入れる。そうしたら中国に依存しなくても、TPP の方で稼げるわけですよ。すごい国ですよ、シンガポールは。これを 20 年くらいかけて地道にやってきて、今花開こうとしているわけですね。だからそういうことを皆一生懸命考えて、いかに自分の国

を、平和を守るかということをやっているわけです。日本はたまたま、冷戦の中でアメリカにくっついてさえいれば、アメリカの核兵器に皆びびって、日本に対しては何もしない、という状況だったので、あまり考える必要は無かった。ところが冷戦が終わっちゃると、アメリカだってそんな、いつまでも何でもかんでも出来ないから、やっぱり日本もそういうことを考えていけないといけない、という状態です。

レジュメ最後の○印に行きます。最後に、これは一番皆さんに話すのが嫌なことなんですが…私が言ったように、「抑止力は確かに、何も戦争をするためのものじゃない」と。「抑止力」だと。「軍事力を持つことによって相手が攻撃しない」という風に言ったけれども、これは、はったりじゃ駄目なんですよ。たくさん軍事力を持って、口では「やったるで～」と言っておきながら、「こうやって脅しておいたら誰も私達に喧嘩を売らないだろう」と、こういう風に構えていたら、どこかではったりがばれた時には、それで日本の信用というものは失墜して、二度と「抑止力」というものが効かなくなるんですよ。だからはったりでは駄目なんです。だからやっぱり、「戦争をする」という覚悟、「戦わないといけない」という覚悟を持っていないと、本当の抑止力にはならない。平和というものも守れない。これが人生の逆説だと思います。これは国だけじゃないと思います。日本というのはものすごく平和な社会ですから、あまりそういう風に意識される方はいないですが、ちょっと外国なんかで仕事をしたりすると、やっぱり、皆当然平穏、平和、安定を求めています。でもそれは、放っておいても来てくれるものではなくて、戦って勝ち取らないといけないものなんです。それを勝ち取るために戦う中で、もしかしたら新しい敵が出て来るかもしれない。もしかしたら敵がもっと敵意を持って来るかもしれない。でもこ

れが、人生そのものの逆説だと思います。皆さんと私の意見で違うのは、多分ここだと思うんですね。私と違うのは、「いや、北神さん極端やで。仲良く出来るんだ。仲良くして平和というものを守ることが出来るんだ」という考え方なんですね。私は、それに対して「違う」とは言えないです。「違う」とは言えないけど、私はそう思わないな、と。それは自分の経験からしても、国の歴史、過去の国際政治から見ても、そんなことは一つも見たことが無いと。だから私は、国のためにはこういう覚悟もしないといけないと。

ですが、簡単に「戦争」とか言うつもりはございません。戦争を美化するつもりも全く無いし、私だってそんなものしたくないです。戦争は、悲惨で、無駄で、経済的にも全く愚かです。そんなことはするべきではないんですが、これが国と国との間の冷徹な現実だと思います。そういった意味で、北神塾第2講でお話ししたような、「健全な愛国心」、健全な、ちゃんとした愛国心ですね。ただ「国のために」と盲進するのでは、誰も納得しませんから。そうでなく、この国というのは、「日露戦争の勝利を機に世界で初めて有色人種が一流の国家として台頭した、立派な国なんだ」、「他にこんな国が世界にありますか」と。

「今中国やインドが世界でも台頭してきていますが、その道筋を一番初めに作ったのは実は日本だ」と。そういう、「国の物語」というものを皆で共有しなければ、とてもそういう覚悟というものは出来ない。だから私は、集団的自衛権とかそういう話の前に、「本当にこういう覚悟があるのか」ということを、本当は総理大臣は語らないといけないと思っています。つまり、何となく世の中右傾化して、「中国をやっつけたれ」とか、こういうことを皆平気で言うようになったんだけど、「本当に、尖閣諸島というあの小さな岩のために、あなたの息子が命を落とすようなことがあってもいいんですか？」と。あるいは「人を殺してもいいんですか？」と。そこを本当に覚悟を決めないと…なぜこんな

ことを私が言うのかというと、日本はこの問題をずっと避けてきましたから。韓国や中国は、皆この問題に日々直面しているわけです。徴兵制もあるし、親御さんは「そういうこともあり得る」と思っているわけです。「それでもしょうがない」と思っている人もいれば、あるいは「こんなことはやってられない」とアメリカに行く人もいるし。いろんな人がいるけれども、皆この問題に直面している。でも日本では、この問いを誰も発していないので、国民も何となく覚悟が決まらないまま、何となく軍事的抑止力の方向に行っているということに、実は一番危機意識を持っています。

最後に、もう先程申し上げましたが、『憎しみの連鎖』と人生の悲劇性」というものについて。「北神さんの言っていることで、100%平和を確保することが出来るんですか?」、「軍事的抑止力とか言ってるけど、100%それで平和を守れるんですか?」と訊かれると、「いや、100%は無い」と答えます。でも、他の手段よりは確率は高いと私は思っています。なぜ100%じゃないのかというと、やっぱりこの「憎しみの連鎖」とかね。そういうものが必ず出てきます。…ということで、少し時間が過ぎてしまいましたが、ご清聴ありがとうございました。

〈第4講終了〉